

外交官として世界の保健課題に取り組む

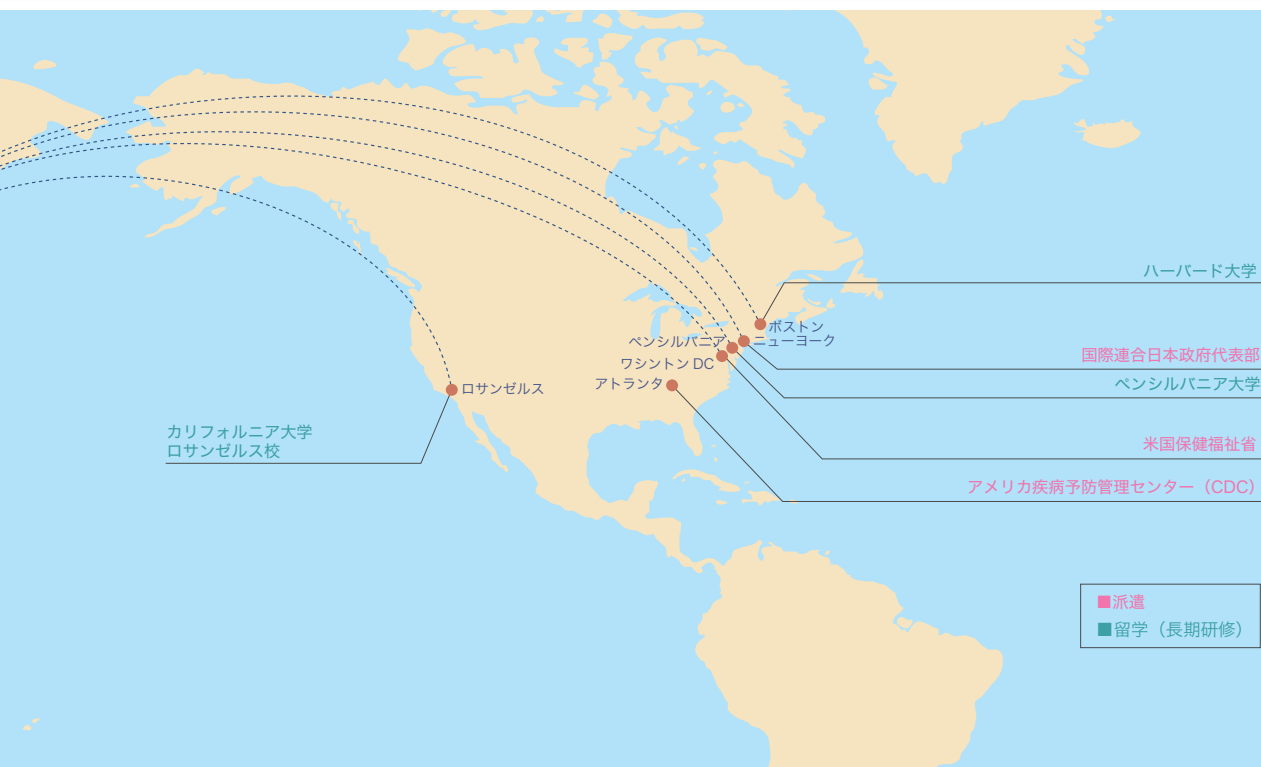
一般的には、国際保健の舞台はジュネーブという印象が強いかもしれませんが、しかし実はニューヨークでも、日本が主導しているユニバーサル・ヘルス・カバレッジ(UHC)をはじめ、エイズ、結核、非感染症、薬剤耐性などの議題が、首脳レベルの会議で取り上げられています。

現在はほとんどの交渉がビデオ会議で行われており、外交官の「対面で交渉を行う」イメージとはかなり違うものとなっています。そんな状況でも、COVID-19以後の世界を日本の知見や技術等を背景に、保健外交を通じてより良いものにするべく各国の外交官や国連機関の職員と共に努力しています。



国連日本政府代表部参事官
喜多 洋輔
KITA Yosuke

医系技官は、国内行政はもちろんのこと、世界各地でその活躍が求められています。保健医療政策や公衆衛生分野の課題は、一見、地域特有のものでも、世界共通の課題として捉え直すこともできます。我が国の知見を活かせる場は数多く、国際機関で各国代表と交渉、提案をしたり、留学により専門知識のさらなる習得を図っています。日本と世界をつなぐ、その活躍の場はますます広がっています。



人事院長期在外研究員
(ハーバード公衆衛生大学院)
吉川 裕貴
YOSHIKAWA Yuki

現在進行系で構築されていくエビデンスを学ぶ

入省後、医師偏在対策、診療報酬改定、予防接種と複数の分野を経験する中で、自分に不足している知識や経験が具体的に見えてきました。このギャップを埋めるため、現在は、私はハーバード公衆衛生大学院で保健医療政策を学んでいます。実務経験後に大学院で系統的に学ぶ日々は、研修医時代、診察後に教科書を読み直していた時間に似ていて、どこか

懐かしい思いです。

コロナ禍の米国では、現在進行系で大量のエビデンスが創出されており、教授や同級生と行う熱い議論から、公衆衛生という学問の進化を肌で感じています。留学で新たな武器を手に入れ、日本の保健医療政策に貢献できるのが今から楽しみです。